

こいふ一般の問題だけが残る。然しそれも大體は既に前記の發明で解決されてゐるわけで、時間の長短と分配の差等と體質性質の適否とで、自然の按排が出来さうに思はれる。

二〇

然し村の祭りの素人芝居で、勸平役の希望者が五人も七人も出来て困つたといふ話もあるから、其の邊の事を今少し考へておく必要がある。

誰でも出来る様な普通の仕事ならば、時間の長短と分配の差等とで大體割合が付く筈である。今日でも、報酬の多い職業は希望者が多く、希望者が多過ぎるに其の報酬が自然に少くなるこいふ所でさうやら大體の割合がついてゐるのだから、新社會でも分配の差等がある以上、矢張りそれに依つて割合が付く筈である。若し又、分配の差等がないほど進んだ社會になつたら、希望者の多過ぎる仕事は時間を長くし、希望者の不足する仕事は時間を短くするので、自然に過不足が按

然し特に長日月の修業を要する仕事、若しくは多大なる熱誠を要する仕事になると、之は主として體質性質の適否に依つて取捨を定めるより外はない。勿論こゝにも矢張り時間の長短、分配の差等が影響して來るに相違ないが、時間は長くても、分配は少くても、俺はさうしても何々になりたい、なこゝいふ希望者が、其の社會としての必要以上に大勢現はれる場合もないとは限らない。其の場合には、矢張り今日の試験の様な方法で、其の社會が其の人々の適否を判定して、最も適當と認める人々を取るより外はあるまい。

然し社會の判定が必ず正しいとは限られないから、そこに不公平と不經濟とが生じ得るわけであるが、さうして本人の自信が必ず正しいとも限らないから仕様ががない。先づ一人の自信よりも多數の判定の方が正しいものとして置くより外はあるまい。尤も、それに不服な者は、他の方面の職業に従事しつゝ、可なり多い其の餘暇を利用して、別に其の自信をためすべき修業をする事も出来ないわけ

二一